

社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協同に基づく人類進化理論の新開拓

第5回方法論研究会

1. 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です

Copyrighted materials of the authors

2. 研究会基本情報

日時： 2021年8月18日（土） 13:00～17:00

場所： オンライン会議

発表者： 竹ノ下祐二（中部学院大学）

「和解」は測定可能か：大村へのリプライ

3. 発表要旨

「和解」は測定可能か？ 大村へのリプライ

（竹ノ下祐二）

本発表の目的は、伊谷による霊長類の行動記述語の第8類型「社会の形成と維持にかかわる行動」（伊谷, 1981）が、本科研費が目指す「文化・社会人類学と霊長類学に共通の方法論」開拓の出発点としてふさわしいことの再確認である。この提案は第4回方法論研究会において大村が行なった。だが、霊長類班の中川から強い異議の表明があり、そのまま立ち消えになりかけていた。両者の見解の相違は本質的ではなく、2つの分野で「データ」という語の用法に相違があり、それに起因するすれ違いだと私は考える。本発表を通じてそのすれ違いをときほぐしたい。

実際、自然科学の一部としての霊長類学においても、伊谷の第8類型にカテゴライズされる terminology はいくつか見出される。その典型が「和解」である。和解は行動目録的には「敵対的交渉の直後に当事者間で交される親和的行動」と定義され、多くの種で確認されている。和解という用語を提唱した de Waal はこれを「社会的なホメオスタシス行動」だと論じ、霊長類の群れ統合維持機構のひとつと位置付けた（de Waal & Yoshihara, 1983）。de Waal の位置づけはまさに伊谷の第8類型にぴったりあてはまる。

だが、和解の研究が進むにつれ、群れの統合機構や社会関係の調整といった役割は否定されてきた。Silk (2002) は、和解が群れ統合や社会関係修復などの機能を持ちうるには高度な社会的認知能力が必要であると指摘し、そうした機能が認められる種は限られていると結論づけた。現在、和解は敵対的交渉の当事者どうしが互いにもはや害意のないことを確認し安心する（そして究極的には効率的に資源にアクセスする）行動とされる。

和解の位置づけの変遷は、詳細な研究によって理解が進んだ側面もある一方、研究のトレンドが「社会」から「個体の適応」に移ったことの反映でもある。本科研費が「社会性の進化」を追求するにあたり、あらためて行動の社会統合機能に注目することには意味があろう。また、ある行動（行為）が社会の形成と維持にどうかかわっているかを問うことは、それが行為者にどのような適応的帰結をもたらすかを問うことと両立可能である。よって、伊谷の第8類型は、現在の霊長類学においても「使える」ものだといえる。

ではなぜ、第4回方法論研究会で霊長類班から第8類型の活用に異論がでたのだろうか。本科研費は、ヒトを対象とした研究とヒト以外を対象とした研究をデータレベルで比較することを目指している。この「データ」の捉えかたに文化・社会人類学と霊長類学とで差異があるためだと私は考える。

霊長類学者が習熟している動物行動測定論において「データ」とは原則として行動の測定値（行動にアサインされた数値）である。測定の対象となる行動は、外形的または短期的な帰結で定義できなくてはならない。だが、伊谷の第8類型は定義語ではなく記述語である。霊長類学者にとって第8類型は「データ」を解析したのちに使える概念であって「データ」そのものにはなりえない。だから「第8類型のデータ」は不可能で、協働の共通概念として出発点にすることはできないという帰結に達してしまう。

よって、われわれは、われわれの目指す「データレベルの比較」の意味を再定義し、共通認識を形成する必要がある。以下はそのための提案である。まず、「データ」を（霊長類学における測定値や文化・社会人類学におけるより質的データといった）一次情報とすべきでない。むしろ一次データは対象によってさまざまにかまわない。ただし、あくまで行動・行為（言語行為も含む）の記録（record）でなくてはならない。そして、記録をもとに、それが調査対象の社会においてどのようなはたらきを持つかを、伊谷の第8類型を用いて記述（description）する。その記述を比較するのだ。

この提案が受け入れられるならば、方法論研究会における次の課題は、1) ヒトとヒト以外の霊長類とで対照可能な記述のありかた、2) 記録から記述を生成す方法、の2つを検討することである。

参考文献

伊谷純一郎, 1981. 心の生い立ち —社会と行動—. In: 藤永保 (編), 「講座現代の心理学 1 心とは何か」. 小学館, 東京, pp. 91-155.

Silk JB, 2002. The Form and Function of Reconciliation in Primates. *Annu. Rev. Anthropol.* 31, 21-44.

de Waal FBM, Yoshihara D, 1983. Reconciliation and Redirected Affection in Rhesus Monkeys. *Behaviour.*

4. 議論のまとめ

I. 適応度の考え方

- ・生物学において進化を語る時、適応度 fitness の話が、“なぜ why”という観点から語られているように感じる。起原を考える時に重要なのは、“なぜ why”ではなく、現象を追いかける中でどのように変化してきたのかを問うべきではないか。文化人類学では“なぜ”を問わないので、その点に違和感がある。
- ・感覚でしかないのかもしれないが、適応度が上がるという話を基本的にしたくない。かつて、文化人類学にも適応論や唯物主義、環境決定論的な議論があったが、機能や生態適応で考えることには限界があり、それを前提に考えたくない。適応を前提にしないで考えた方が生産的だと思う。
 - Fitness Consequence の訳は難しいが、行動生態学では、「ある行動なり性質なりが進化の産物であるとするならば、それは適応度にプラスの影響を与えていたに違いない」ということは所与のこととして考える。その行動なり性質がどのようにして適応度の上昇に貢献しているのかを明らかにする、ということが fitness consequence を解明するということであり、“なぜ”ではなく“如何に how”を問うということである。

II. 仮説や問いの立て方について

- ・人類学において、記述というのはそもそも問いがあってそれを説明するために行うものである。霊長類学はそれとは違う感じなのか。
 - 生物学であるところの霊長類学においてその問いというのは決まっていて、その行動なり性質なりがどのようにして個体の適応度の上昇に貢献しているのか、ということが問いとして所与である。その意味でいうと、オーソドックスな霊長類学において、研究者個人が自分の問いというものを作る、鍛え上げるというプロセスは、人類学者が言っている意味での問いを作るプロセスとは全く違って、仮説を立てるということである。そのところからして違って、ならばやはりこの研究会で協働を進めるには、サル屋が fitness consequence に還元されない形の問いを見出していくとも必要なのかなと思う。
- ・文化人類学でも仮説を立てる。多くの人がやっているのは、自分たちとは違う世界に生き

ている人たちのリアリティとはどういうものなのだろう、ということをやっている。違う人々の集団になると自分たちとは違う感覚があるということが問題となり、それが記述用語上の問題にもなった。それを考える時に、現地の人たちはある行動の特性を持って物事を分けているのではないかという仮説を立てる。それが弁別組成である。第八の類型は弁別組成になりうるもので、伊谷(1981)の許す/許さないということに人間の場合だとこういうものが当たるのではないか、という議論ができると思う。

- ・異なる存在におけるリアリティって何だろうという問いは非常に重要かつ面白いと思う。それはまさに、コロキアムの時に出てきた経験する主体としてサルを捉えるということにもつながってくると思う。ただ、改めて確認したいのは、私たちは霊長類学と文化社会人類学の融合を目指しているのではないということだと思う。この科研のテーマである社会性の起原と進化、というものにどう向かっていくかという観点から考えたときに、異なる存在におけるリアリティを重要視するのはいいが、それが社会性の進化を論じることにつながるのかということが分からない。少なくともあと三年で何か出すうえでは、そっちの方を考えるべきかと思う。

III. 観察者バイアスについて

観察者の属性について

- ・人類学者は、観察者としての自分の立ち位置(ジェンダー、国籍)を意識している。一方で、自然科学分野の研究者は、動物の観察時に観察者側の状況は語らず、共有もしていないのではないか。
- ・文化人類学の分野では、同じ対象社会を研究しても、観察者バイアス(ジェンダー、国籍)によりみえるものが異なってくるという話はよく聞く。霊長類学においては、リアリティは1つなのか、それとも観察者により異なってくるのか。
 - 科学のほとんどの分野ではジェンダーで変わってくるだろう。
 - 自然科学としてやっているので、表には大きくはでてこない。

観察者同士の感性の一致について

- ・霊長類の研究において、同じような数量データの解釈で互いに齟齬があるということはないのか。
 - チンパンジーのアリ釣りでは、母親が使っている道具を子供が取っていくことをする。似たような研究が飼育下でもあり、それについて寛容という言葉が使われる。マハレで見ている感じでは寛容と感じたことがなかったが、そういう齟齬をより議論を深めたときに社会において寛容だということはどういうことなのか、サルにとって、人間にとって寛容とはどういう状態なのか、どういう行動を含むのかといった議論は深まっていくのかもしれない

- ・感性はトレーニングでおおよそ身につく。サルを観察を少ししていれば、サルの行動がわかるようになってくる。特に、同じ調査地で観察している人とは、サルの行動に関する見解(感性)が一致してくる。
 - 人間でもそういうことはある。サルは話さないため、調査者同士でそういう見解の一致が生じることは不思議である。人間ではその人が説明をしてくれる。また、人間相手にはインタラクションが可能で、相手に対し働きかけ、かみ合うことで、自分の解釈が正しいことに確信が高まる。しかし、対象がサルでは難しいのでは。
 - 会話がかみ合う、レスポンスがあることをインタラクションと呼ぶならば、サルの観察には対象との間にインタラクションはない。しかし、サルの観察はプロアクティブな行為である。観察をするためには、サルの行動を予期しながら観察をする。個体追跡も最初はサルについていけないが、ついていけるようになる。観察もインタラクションの一部なのでは。
 - サルを観察している人同士で、例えばこれは「和解」だ、という解釈が一致する背景には、明示的ではない対象とのインタラクションがあるのでは。そういうものも含めて共有されたときに意見の一致がみられるのではないか。
- ・現場で直接サルの観察はせず、例えば、カメラでの自動撮影データによる解析のみする研究者が現れたら、現場にいたら思いつくようなことを思いつかないかもしれない。一方で、直接現場にいたら思いつかないことを思いつくこともあるかもしれない。
 - カメラでの自動観察は、現時点ですでに持っているデータの質としては低い(例.カメラで個体Aと個体Bが映っている回数≒交渉頻度)。将来的に、技術が進めば、操作的な定義を駆使したデータ収集が可能となりビッグデータ化が進むだろう。一方で、稀にしか起こらない行動は拾いにくくなるのでは。

IV. サルとヒトの比較：和解行動

比較のベースラインについて

- ・比較をするためには、取得する行動のベースラインを合わせる必要がある。例えば「和解行動」のデータを取得するにしても、攻撃交渉後に親和的な行動をとるかどうかなど具体的な行動を考える必要がある。例えば、ニホンザルの和解行動に関していえば、クリスマスやリップスマッキングのような緊張緩和行動のデータも意識してとった方がよいと思う。
- ・霊長類の種により和解行動の頻度の程度が異なるため、量的な問題についても考える必要がある。

和解場面について

- ・そもそも人間を含む霊長類という生き物は、なぜ「和解」が必要なのか。和解が必要に

なるような感情構造をつめておかなければならない。チンパンジーを観察すれば「これは和解である」とわかるかもしれないが、ニホンザルでは、私は「あれが和解」だと思ったことはない。

- ・チンパンジーは広い文脈で和解行動を使えるため、人類進化に結びつけやすい。一方で、例えばヒヒは、操作的な定義で計測できるような和解行動の文脈で実験計画をたて論文を書いた後に「和解」として認められる。その後、認知能力や文化の問題を論じた後に、チンパンジーやヒトにつなげていく。このように、ただ直線的に系統を並べずに議論できたらと思っている。
- ・今回竹ノ下さんがとりあげた「和解」は、日常生活レベルの和解である。ヒトにおいても日常的な和解を視野にいれないとサルとの直接比較にはならないのではないか。
 - その通りだと思う。アフリカでトラックが「すぐに帰ってくる」と言って村に帰り、仕事に戻ってこなかったことがあった。その後、お酒を飲んで帰ってきた。「今日は仕事にならないので給料は払わない」というやり取りの後、すぐに「金を貸せ」とトラックが金をせびりにくる。その際は、その行為を和解とは理解できなかったが、ドゥ・ヴァールの和解研究を知っていると、和解しに来たということがみえてくる。しかし、これをトラック本人に指摘しても「ちがう」と答えるだろう。
 - 相手に対し「和解だよ」と尋ね、相手が「ちがう」と答えた場合、「和解」として解釈するのはどういうことなのか。
 - ドゥ・ヴァールの研究を知らなかったとしたら、「和解」とは思わなかっただろう。

V. 共通の方法論の検討

人類学と霊長類学が協働可能なテーマ

- ・ニホンザルの寛容性といったときに日常語で言われている寛容や寛容性と同じだって理解されることに対して引っかかりがあるという点はよくわかるし、言葉が同じだから同じものとして扱うのはよくないというのはよく分かる。ただ、寛容的であるとか専制的であるという用語が用いられるようになっていった経緯とかフィールドで観察しているときの実感として考えたとき、やっぱり寛容的という語を当てることに対してそれなりに納得がいく感があって使われるようになったのだと思うので、決して全く違うものというわけでもない。マカクにおける寛容型と専制型というターミノロジーを知らない人が見ても寛容型のマカクを見たら寛容だなど思うような蓋然性はあると思う。そこに蓋然性があるということを丁寧に考えていくということがこの研究会では必要だと思う。
- ・アクションのための語(例. 歩く、走る)よりは社会に関わる語、現場で見出しうる言葉(例. 第八の類型の行動)を対象とすると、人類学と霊長類学で観察事実を持ちよれ

るのではないか。

- ・「他者・制度」のような大きなキータームは、観察事実を持ちより話しをするには大きすぎる。
- ・「攻撃・もののやりとり」は、霊長類種によっては頻度が低い、またはしない種もあり人類学と霊長類学の両分野で取り扱うのは難しい。
 - もののやりとりと行為のやりとりは、あわせて考えてもよいのでは。霊長類の場合は毛づくろいをするという行為なども「やりとり」レベルで広く考えたほうがよいのではないか。ものと行為のやりとりを包括するようなタームがあればよい。
 - しかし、「もののやりとり、行為のやりとり」を対象とすると、なんでもやりとりとなってしまう。
- ・人間の場合における和解ということを直接の観察だけに絞って考えるというのは、ふつうの発想でいうとかなり難しいと感じた。人間の和解のやり方は、かなり複雑化し大規模になっていて、直接の行動とか対面相互的なインタラクションを超えたレベルでの様々な出来事がどうしても多く含まれてしまう。サル屋とヒト屋がどういうものを見るかという選択によっても方法論的な共役ができるかどうかが変わるのではないか。
 - 徹底して行動を観察するという事は、サル屋にとってはそれほど難しいことではないが、ヒト屋の方がどのように感じるのかが気になっていた。人類学者の王道を捨てよとか霊長類も自然科学やめましょうというような話にはしたくない。協働しようとして集まっているのだから少しチャレンジをしようという風に呼びかけたい。どうやって記述を創り出していくのかというところで、考えないといけないということがあのように、徹底して行動を見るということ突き付けられた時にどうやって折り合いをつけていくか、何か見つけられないかという期待、願いを持っている。

記録から記述を生み出すプロセス

- ・行動を観察して記録していくのはこれまで通りしていく、(伊谷の第八の類型を使うかどうかは別にして)そこから何らかのディスクリプションを生み出し、それを突き合わせ必要に応じて記録に戻り記述を生み出そう、という提案は実用的で実現可能性が高そうだし面白そうだと思う。
- ・ただ、動物の研究をしている人は、記録なりデータを量的統計的に分析するスキルはあるが、そこからディスクリプションを生み出す方法やスタンダードがない。動物の行動を記録して、そこからどうやっていい記述を生み出す方法論が動物に関してはないというのが大きな問題である。人類学にはそれがあるだろうから、ヒントになりそうなものをリストアップしてほしいと思う。
- ・人類学者は現場で見てノートに記録し、そこからエスノグラフィを書くときに数量的な分析をする場合もあるだろうし、解釈というか記述を生み出していくことは、学問のディシ

プリンだと思う。動物研究においてそれをどうやったらいいのかということが重い宿題としてある。

- ・記述の方法が決まったものがない、ディスクリプションの仕方がないというのは、動物ではそれが求められていないということなのか？
 - あまり求められていないと思う。少なくとも第八の類型を用いたレベルでの記述はない。
- ・記述の方法を考えるとすることは、操作的定義を作るということと関係するののか。
 - 操作的定義は行動を観察し記録をするときに必要なことであり、“記録をしたうえで記述を生み出す”ということとは異なる問題意識ではないか。
 - それは、機能的なこととつながっているので切り離せないのではないか。計画を立てる時に仮説を立てる必要があって、仮説を立てたときに機能的な行動要素を切り出してくるので、操作的な定義を作るということは仮説を立てることと切り離せない。記述の仕方というのは仮説の立て方のところに全部入ってしまっているのではないだろうか。
- ・松田(1989)は、フィールドで起きている出来事、そこから民族誌に至るまでのプロセスの様々なスタイルが人類学の世界でもなされているということをお話しつつ、最終的にはどれがいいとかがあってということはない。行動から記述を生成するプロセスをどのようにして埋めていくかということをお丁寧に考えていく必要があると思う。
 - 記録から記述を生み出すうえで、どんなことが必要になるのか、何を考えないといけないのかということはお長類班で少し検討する課題としてもいいのかなと思う。

記述の方法(提案):実際の行動/行為→記録→第八の類型(社会的な形成と維持に関わる語)を用いた記述

- ・第八の類型を用い「社会の形成と維持」のモデルを基礎にすることだったが、フレームを設定することにより、スコープを狭めることにならないか。ア prioriに決めてしまってよいのか。特に、社会の「維持」については、古典的な機能主義的社会統合論のイメージと重なる(例. 社会の統合のために儀礼をする)。
 - 伊谷(1981)の「社会の形成と維持に関わる語」というのは、凝集性に限定するというわけではなく、そこに見出すことができる構造について述べていると思う。
- ・データには数値データの他に音韻分析をもとにしたデジタルデータがある。音韻分析とは、喋っている人たちにとって最低限意味がある単位とは何かということを探り出すための方法論である。この方法では二項対立を基礎的な単位に、シンタグマティック syntagmatic なものとパラディグマティック paradigmatic なものがあるという構造を考える。それと同じことができるのではないかと思う。やっている当人にとってどういう行為に意味があるのかということ、前後関係や時間的なコンテキスト、空間的なコンテキストを基に音韻論の分析をベースにすることで引き出せるのではないか。

- ・人間でもサルでも相手の考えていることはわからないが、「意義のある相互行為の単位とはなにか」を考えることはできるのではないか。ある構造、ある種の集まりがつくられる際に、最小の単位となるような相互行為を追求するのはどうか。
- ・第八の類型の「許す/許さない」の行動は単位の問題として考えたらどうか。どのようにシステムがそこから組み立てられるのかは、また別の問題である。行動を追跡するのではなく、単位を決定することが、重要となってくるのでは。
 - 大村さんは第八の類型がスタート地点となっている。一方で、例えば、ドゥ・ヴァールは、仲直りを低次の行動に落として分析し、「仲直り」をゴールとしている。霊長類学者と人類学者で「第八の類型」をゴールとするか、スタートとするかが異なっているのではないか。
 - 1) フィールドで現実におこっていること → 2) 測定するためにデータをとる(一次記録) → 3) データとなる(抜け落ちているものがある) → 4) 記述。それとも、フィールドに行き「和解している」と思ったところからが、スタートとなるのか。フィールドからわかるというプロセス全体を議論し直す必要を感じている。
 - 「こういう現象がおきた」というのがスタートのはずだが、動物行動学で位置づけるためには、スタートをゴールにしなければならない。なぜわれわれはあの現象を「和解」と思うのかというのを考えるのがよいのでは。
 - 試してみたいが、それで「進化」にたどり着くのか。
- ・議論をしていくなかで必要に応じて数量データに戻ったり観察したことに戻ったりしながら議論をしていくことによって、そもそもの研究会の目的である社会性の進化ということに関する協働による新しい考察を生み出しうるのではないか。

(以上)